日本仏教における「六道」概念の変容

――経典記述の「解像度」と十二世紀の造形化を中心に――

お茶の水女子大学　李遡彦

仏教における「六道」とは善悪の業報により輪廻する六つの世界（地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人・天）を指し、その様相を描く絵画を「六道絵」と総称する。日本では平安後期以降、現実の戦乱や社会変動が相次ぐと同時に、仏教において仏法が衰退する「末法」の時代（一〇五二年～）に入ったとの危機感から六道全体の体系が重視され、十二世紀末（後白河院政期）の「六道絵」連作絵巻が誕生した。

近年、「六道絵」や『病草紙』をめぐっては、美術史のみならず宗教史や経典解釈の視座からも研究が進められ、本作の中核的典拠が『正法念処経』（全七十巻）と解明されるとともに、一部場面では複数の経典を参照した可能性も指摘されている。しかし、従来の具体的な照合は同経最末の「身念処品」（巻六十四～七十）に見える虫や風の「生理的症状」との局所的対応に偏重し、病状と合致しない日常描写は「経説からの乖離」と見なされてきた。これに対し本研究は、歴史文化・経典受容の視座から仏典テキストを精読・対照し、視野を同経全編を貫く「善悪業報」の教理および諸経典との複合的参照へと広げることで、画中の日常的モティーフが経文テキストに確かな根拠を有することを明らかにする。

まず、従来の「単一箇所の病虫記述への還元」という手法の限界を示すため、『病草紙』のうち先行研究で最も経文に忠実な「直訳型」とされた「霍乱の女」の場面を取り上げる。従来は詞書にない「嚙骨虫」の「不憶飲食」を根拠に、周囲の食事風景や庭先で排泄物を食う犬を「患者の食欲不振を際立たせる描写」と解釈してきたが、同経の「白節虫」「針口虫」や、同連作の『餓鬼草紙』（京博本）も典拠とした『大般涅槃経』と対照すると、「嚙骨虫」のみへの比定では説明しきれず、この解釈には再考の余地が生じる。その上で複数の経説と全編の業報観から三場面を検討すると、①「鼻黒の親子」の弓矢と父子四人の黒い鼻は、同経巻一「十善業道品」が説く悪知識との日常的な起居・遊戯を通じた殺生業の継承を身体の刻印へ転訳した表現、②「風病の男」の囲碁は、同経巻十九「畜生品」や『梵網経』等が戒める「博戯」への耽溺を表象し、病苦の肉体との対比で無常の内観を促す構造、③上述の「霍乱の女」において、経典上の根拠が見出されず食欲不振の対比と解されてきた「庭先で排泄物を食う犬」は、『中阿含経』「大品癡慧地経」が説く前世の貪食の果報と呼応し、現世の病苦の背後に畜生道の業報を重層的に暗示する表現として読み解くことができる。

以上のように、本報告では『病草紙』の日常描写が、殺生・博戯・貪食の戒めという経典の因果論を同時代の生活情景へ置き換えた「視覚的コード」であり、鑑賞者に「如実知身」の内省を促していたことを論証する。これにより、異界を中心に捉えられていた従来の六道概念が、本作において現世の日常と身体の内に業報の連鎖を見出す「内在的・現実的な六道観」へと変容し体現された様相を明らかにする。